論　説

川の思い出

*佐合純造

「川」と聞いてどんな川を思い浮かべるだろうか。仕事や観光で訪れた有名な川、通勤途上に見かける小さな川、それとも外国の河かもしれない。ロマンチックな人は「天の川」や歌謡曲の川を思い出すかもしれない。

いささか回顧趣味で論説らしくないことをお許しいただき、この機会に私の故郷や川の思い出を書いてみたい。

私は岐阜県川辺町という名古屋からは50kmほど北にある飛騨川(木曽川の上流支川)沿いの小さな町で生まれた。

歴史をたどれば、そこは昭和の初めごろまでは鉄道や道路も未整備で飛騨川を利用して物資を運んでおり、特に木材の集積地(綱を川に渡して木材を集めていたため「綱場」と呼んでいた)として結構繁栄していたという[1)]。祖父のころには我が家は米屋を営んでおり、木材と同じく、川の利を生かした商売をしていたようである。しかし、大正から昭和の初めにかけて発電のためのダムが登場し、また、時を同じくして鉄道(高山線)が飛騨川の上流へと整備されていった。このため、川から鉄道や道路へと物資の輸送が次第に切り替わり、輸送の手段としての川の役割が薄れていった。米屋の商売もそれとともに行き詰まり、新天地を求めて名古屋に引っ越した。その後、名古屋で空襲の被害に遭ったり、父が電力会社に就職したこともあり、再び、この町に戻ってきた。

町は両側から山と飛騨川に挟まれた谷間にあり、我が家も川の端に建っていた。川が眼下によく見え、軒先からでも釣りができそうなところであった。水はダムによって深く貯まっていたが濃青色できれいであった。しかし、洪水になるといつの間にか増水して水は土色に変わっていった。

私は1日中、勢いの増した水の流れや、水と一緒に浮いたり沈んだりしながら流れてくる流下物を飽きずに見ていた。木片やゴミのようなものが多かったが、中には、畳、ふすま、犬、猫の死がいらしきものが流れてきて、上流ではどんな水害がおこっているのかと子供心にいろいろ想像力を働かせていた(今から考えると、それは必ずしも洪水被害ばかりではなく、洪水に合わせて流されたものだったかもしれない)。

さらに水位が上がってくると、今度は町のサイレンが鳴り消防車が出動して我が身に危険が迫ってくるようで緊張した。川沿いに低いところにある家は流されそうになり、水防団が集まって綱で家を引っ張っているのを見た記憶がある。

しかし、川の記憶は怖いことばかりではない。なんといっても川は水遊びの場である。夏になると毎日のように「みずあびに行こう」と誘い合って川へ出かけた。ただし、飛騨川本川は深くて危険であるため、主な遊び場は小さな谷川であった。そこは水はきれいで深さもほどよく川の形も変化に富んでいた。所謂、瀬や淵が随所にあり、年少は瀬で、年長になると淵まで行って遊んだ。川に潜ったり、小さな魚を捕ったり、岸に上がってスイカ割りをした。また、行き帰りの道中も虫取りなど楽しい世界であった(写真)。

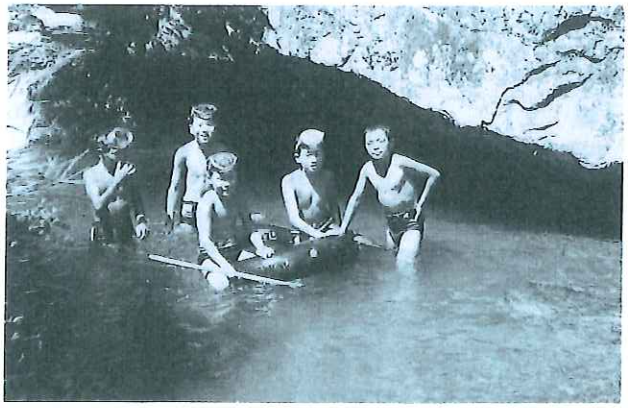

写真 当時の川遊び風景

*独立行政法人土木研究所水循環研究グループ長

谷川の水は町の簡易水道の水源にもなっており、生活にとっても必需であった。私たちが川に行くと水が濁ったが苦情を言う人はいなかった。一方、雨で谷川が増水している時も水道の水が濁ったが、そのような時は川には行かなかった。

このように、洪水の時も普段の時も川は生活と一体であったし身近であった。

しかし、今はそこで遊んでいる子供の姿はない。「川より安全で近代的なプール」という全国的流れの中で、水遊びはプールでということになってしまったようである。

私たちが川で遊んだのは昭和30年代であるが、昭和35年には治水事業5カ年計画が初めて策定された。当時は高度成長の初期で水害や渇水が経済成長の妨げにならないように、また戦後の国土荒廃をいかに早期に復興させるかが急務であって、治水、利水一筋であった。このような状況が昭和50年代前半まで続いたが、昭和47年に建設白書で初めて「河川環境の改善」という言葉が現れ、さらに平成9年には河川法により河川環境の整備が河川管理の目的1つになるなど、河川行政も大きな変化を遂げている。

その間、我が国の経済も多少の波乱はあったものの順調に発展してきた。その結果、世界でも有数の経済大国になった。私たちも多くの恩恵を受けてきた。

当時と比べると大きな水害は減少して、安心して生活できるようになった。それだけではなく上下水道、道路も整備され、私たちの生活もたいへん豊かで快適になった。これに伴い自然と触れあう機会が少なくなり、自然と無関係に生活できるようになったようだ。

ところが、現在、日本の経済もバブルがはじけて不況が続き、社会全体が先の見えない迷路の中に入り込んでいる。

今後、人口の減少や高齢化の進行を考えると今までのように大量生産、大量消費といった物質の豊かさだけを追い求めることはできない状況にある[2)]。

一方で、これからの大きな問題の1つに環境問題がある。環境問題と経済成長の両立は技術開発によって解決可能であると言われているがなかなか容易ではない。環境問題は人間の活動によって発生するものである。したがって、人間の力で解決できるはずである。しかし、これまでは目先の経済や快適さの向上が優先されて、環境問題への対応は先送りされやすかった。

そろそろ、何がなんでも「右肩上がり」という目標に代えて、21世紀にふさわしい新たな目標を見いだすことが必要である。お金や物に執着しすぎることなく、心の豊かさやゆとりを大切にして、人間も自然の中の一員であることを忘れないようにすることなど、人間にとって本当の幸福とは何か、子孫のために何を残すべきかをよく考えていくことが大切である。

最近、多くの人々が自然の脅威の制御ばかりではなく、自然本来の価値にも期待するようになってきた。そのための研究も進められている。

「自然共生」という言葉がよく使われている。「共生」は生態学の学術用語であるとともに、宗教家であり教育者でもあった椎尾弁匡師が大正末ごろに仏教の考えをわかりやすく表すためにも使った言葉でもある。すなわち、植物も動物もみな同じ命であって、すべてのものはあの世とこの世を循環しているとして、「共生」を「ともいき」と読んでいる。

「自然共生」とは末長く人類が生き延びるためには人間だけが特別ではなく、自然とともに一体となって生きているという原点を忘れてはいけないということであろう。

今月号の特集は「自然共生研究センター」であるが、私の幼いころ遊んだ川はこのセンターの上流にあり、関係者の1人である私にとってはなにかの縁であろう。

何でも安易に「共生」と言うのではなく、この意味を深く理解して、しっかりとした考えに基づき、これからの社会にとって必要とされる河川や土木技術がより具体化されていくように、さらなる研究に取り組んでいきたいと考えている。

参 考 文 献

1) 安藤宣保：下麻生町誌, 1985.9
2) 松谷明彦、藤正巌：人口減少社会の設計, 中公新書, 2002.6